



## 吉川哲太郎 名誉教授

に聞く

## 同志社の社会的役割

聞き手

河野 仁 昭

塾のような同志社

——先生は大正六年に、同志社大学政治経済部の経済科へ入学なさったようですが、同志社へ進学なさったのは、何か理由がありましたのですか。

吉川 正直申しまして、家が近かったからですよ(笑)。同志社はすぐそこだから。

——じゃア、お小さい頃からこの相国寺東門前町に……。

吉川 十二、三のころからです。当時、相国寺は広大な土地をもっています。それが蔽になっておった。「土地を貸します」という立て札が立っておりましたが誰も借り手がいなかったのです。それを私の父が一坪一錢五厘だったかで借りまして、この辺に何軒も家を建てたわけです。

——そうすると、明治の終りころから同志社を見ていらっしゃるわけですね。

吉川 隣りの家という感じだったから。

——どんな学校でしたか。

吉川 石柱の門なんてなかった、あれは原田(助) 総長のころに造られたので、それまでは、門らしいものはなかったのです。同志

社と町は続いていました。今の正門の辺には車の待合所とか、人力車夫の家族が住んでいる家などがあって、裏で炊事をしている火が、学校の帰りなどに見えたものです。とにかく、どこまでが校内で、どこからが町かわからないような状態だったですよ。

——校舎もわずかで、貧弱だったから。

吉川 それもあります。今は大学といえぱ堂々たる建築物などを想像しますが、当時はそうじゃなかった。私が同志社へ入学したころのことをふり返ってみて、塾という言葉がいちばんぴったりします。そういう学校でした。

——町から切り離された特別な存在ではなかったわけですね。

吉川 世間が学校の中へ入ってきている、という感じだった。だから、近くに住んでいたから、何とはなしにすうーと入った。(笑) 学生たちにしても、私がいちばん若年で十八歳でしたが、世間で種々の仕事にたずさわってきた二十五、六歳の人もいましたし、すでに一家をなしている人もいる、出身地もまちまちで、そういういろんな人が集まって塾をつくっていた。それが一番の特色だったと

思っています。

## 大正期の学生生活

——学生生活はどんなふうでしたか。

吉川 当時は専門学校令による大学で、神学部と政治経済部、それと英文科がありました。が、経済科の学生が最も多くて百二、三十人くらい、政治科は五、六人だったと思います。すが、その中には難波紋吉さんのような優れた人がいて、クラスを牛耳っていました。

——教室は有終館と致遠館。致遠館（大正五年三月竣工）ができたころですね。

吉川 有終館が予科、致遠館が本科でした。教室は各クラス固定していて、先生が時間割に応じて入れ替りたち替りやって来るわけです。専任の先生はあまりいなくて、京大から来られる講師が多かった。大休講義が主で、学生はノートをとるのが仕事でした。

——勉強ぶりはどうでしたか。

吉川 先いったようにいろんな学生がいましてから、サラリーマンの練習のように毎日学校へ行くことを軽蔑する者もいました。「毎日出席する奴は小物だ、将来大をなす人物にはなれない」などと言つて。（笑）

——几張面な勉強型を軽蔑したんですね。

吉川 服装なども、やばつたというか、まちまちでした。

——もう、制服があったでしょう。

吉川 ありましたが、学生の三分の二くらいは和服でした。私なども制服はもっていましたが、卒業記念の写真を撮るときに着たていで（笑）。制服を着ている学生は指折つて数えるぐらいのものでした。

当時は万年筆などは高価なもので、普通は紐のついたインク瓶をぶら下げて行って、ペンのノートをとるのです。

——学校の雰囲気は自由だったとみていいでしょうか。

吉川 そうでした。私は京都第二商業学校に学んで同志社大学へ入ったんですが、第二商業は規律の厳格な学校で、毎朝服装検査があったものです。ところが、同志社では、学校は何もいってくれないから、何をしたらいいかわからないんですよ（笑）。授業料さえ払っておきやすい（爆笑）。その授業料は父が払ってくれるんだから、私には直接関係がないようなもので——。成績なども通知してくるわけでもなく、私も聞きに行くでもな

く。とにかく、怒ってくれる人も注意してくれる人もいないから、学生それぞれが自分で考えてやっていくほかない。そのことが一番印象に残っていますね。

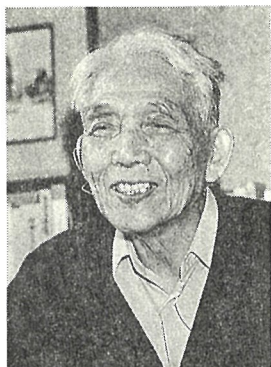
——各自が考える、というわけで……。

吉川 時間割とか最小限度の規則はもちろんありましたが、それ以外はすべて学生まかせでした。だから、学生としては考えることなしにはどうしようもない、それが当時の同志社の特徴でした。そうした中にまた塾的な、家庭的な雰囲気、人間的なうらおいがありましたね。

これは、同志社の教員になってから聞いた話ですが、東京のある大学の学生がきて同志社の構内を歩きながら、「教室に名前がついているのはいいな、うちの大学は一号館、二号館」と話合っているんです。同志社では建物にもそれぞれ名前があり、学校の一員になっているわけです。

——なるほど、慣れてしまつてなんとも思いませんでしたか。

吉川 掲示ひとつにしても、授業料を滞納している学生に対して、「直ちに店頭せよ」と他大学では書く。同志社では「事務室へおい



吉川名譽教授

——スポーツは盛んでしたか。  
 吉川 スポーツといっても、学生数が少なかったから、チームをつくってやるようなスポーツはあまり出来なかった。ベースボ

当時の学生スポーツ

「で下さい」と書いてある。「これなら行っていいという気になるなァ」(笑)と、さっきの学生たちが立ち話しているんです。私はのちに教務部長をやりましたとき、学生を番号で処理するにはよほど気をつけなきゃいかん。「能率一辺倒になってはいかん」と常にいておりましたが、今にして思えば、塾的で家庭的な同志社に学んだことが、そういう考えを私に植えつけてくれたのだと思うのです。

ルもやっていたかどうか。ラグビーはやっていました。他の学校との定期戦とか、神戸の外人が来て試合をするとか。

——今の中学校のグラウンドで？

吉川 そう、あそこで、それも今の半分ぐらいの広さしなかった。ラグビーのラインがぎりぎり引ける程度で。

——キックすると、飛び出してしまいますね。

吉川 だから、相国寺境内の藪に網が張ってありましたよ。(笑)

他に私がやった運動には弓がありました。理化学館の裏の藪の中に細い弓場がありました。中学校の藤田萬右衛門という方と、何という方だったか教員が一人と、いつも二人だけでやっていました。後に知りましたが、大塚(節治)先生もやっておられたらしい。私は近所だから、遊びに行ってみていたので。それで同志社へ入ってからは、授業が終ると一人でやりましたが、やぶ蚊にくわれてしょうがなくなつて止める(笑)。そんな具合でしたが、それでもそのうちに何人かが増え、大谷大学と対抗試合ができるようになりました。しかし、中心は学校の職員でした。

——ボートはどうでしたか、同志社では古い歴史がありますか。

吉川 やっていましたが、今のようならライディングじゃなくて、タンクボートといって固定式でしたが。七人が普通ですが六人でもやれますので、それぐらい人数が集まれば、学校の許可を得て引き出しますね。鯉こくのうまい店があるので、そこへ漕いで行って鯉こくを食べるのが楽しみでした。(笑)

江州から帰りは歩きましたね、京津電車はすでにあつたんだけど、乗車賃が二十五銭くらいだったか、それを節約して、逢坂山の所に今でもある鰻料理屋で、鰻飯を食べるんですよ。まァ、子供らしい学生だったわけですよ。そんなことが楽しみだった。

比叡山へもよく登りました。下駄はきで登ったものです。

——下駄で？

吉川 靴など贅沢品で、当時はたいてい下駄か草履でした。朴歯の下駄というものは、履きなれると案内歩きやすいもので、昔の行者が一枚歯の下駄で山路を歩いたのは、別段不思議ではないですね。



学生時代の吉川名譽教授

### クローバーの中でアメリカ熱

吉川 もう一つお話をしておきたいことは、学生たちのアメリカ熱です。有終館の近くは民家でしたが、階段のあたりにクローバーが生えた広場がありまして、そこへ坐ったり寝転んだりしていろんなことを話しあうわけですが、話題の中心はいつもアメリカ行きなんです。アメリカでは働きのながら勉強ができるとか、そのころパークレーだったと思いますが岡田という人が行っていて、その人から送られてくる情報が話題になりましたね。そういうわけで、三年間のあいだにクローバーの中でアメリカ熱が醸成されて、私の同級では、卒業後一名だけ駄目で、あと七人ほどがアメリカへ行ったのです。

### ——私費留学ですか。

吉川 私費の方もいました。難波さんなどは大沢徳太郎さんのお供をして行かれたので、かなり贅沢でした。他の人は親から船賃ぐらい出してもらって、後は自分で稼ぎながら勉強するといった連中はかりでした。ロスアンゼルスへ行ってみると、「お前も来ているんか」というような具合で、同志社出身者が七、八人もいましたりね。

とにかく、有終館前のクローバーの中で、アメリカ熱が高められた、これは面白いことだと私は思っています。

### ——夢を語りあったわけですね。

吉川 当時はそんな夢しかなかったから。

——働きのながら大学へ行けたんですか。

吉川 そうです。今の日本の大学ではアルバイトなど普通のことになっていますが、当時の学生はのんびりしていた。働きのながら大学へ行くなどということは考えもつかないこととて。ホームステイなどで、ちょっと行って帰ってくるとか、今は便利だし贅沢ですが。

——アメリカではどんなお仕事を。

吉川 ロスアンゼルスだと、農業の手伝いとか材木運搬とかがわりあい収入がよかつ

た。他にはいわゆるスクールボーイに行けば食費ぐらい与えられるとか。私は商業学校で簿記を習っていましたから、商店の簿記をやりましたが、これは収入もよくて、わりあい暮しができました。

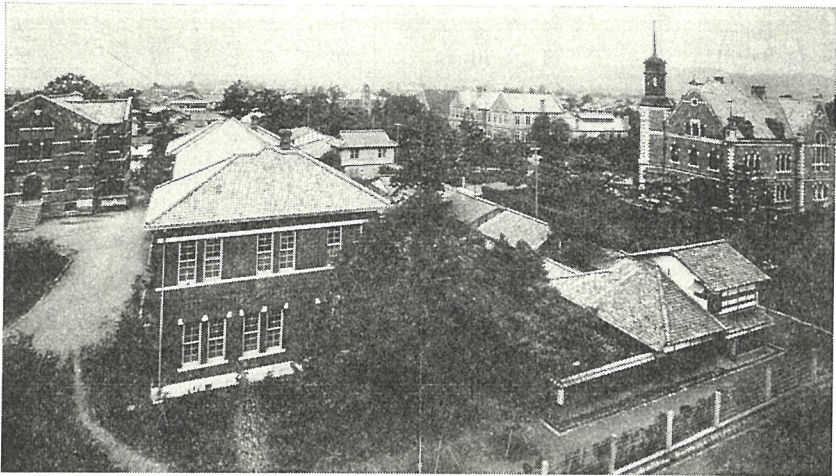
その後は日本人学校の先生を、田舎の日本人学校と二校ぐらいかけもちでやりまして、自動車で駆けまわるなど青年期を大いにエンジョイしました。

### ジョン・デューイの教育学

——先生がジョン・デューイの教育学を学ばれるのは、当然その留学中ですね。

吉川 私は初めは南加（南カリフォルニア）大学にいまして、それからオペリン大学で神学を終えて、また南加大学へ帰って教育学を研究したのです。

その間にニューヨークへ行って、コロンビア大学でも学んでいたんですが、デューイもその大学にいたわけですけども、コロンビア大学というのは大きなインスティテューションの学校で、南加大学のように田舎っばい、また同志社風の家庭的なのん気な学校ではないのです。だから、とてもここでは暮ら



大正中期の今出川キャンパス

せないと思ったし、そのころはデューイについてもよく知りませんでしたので。

——それでもたロスアンゼルスへ。

吉川 以前に簿記を手伝っていた店の人が留学番を頼まれたり、また教会の日本人牧師が半年ほど帰国するので、そのあいだ代りをやってくれないかと言われたりで、ロスアンゼルスへ帰って教育を勉強したんだが、そのころすでにアメリカの教育はデューイ抜きでは考えられなくなっていましたから、私もそこでデューイを学びました。それ以来、いまだにデューイのことはかり考えているわけです。(笑)

——デューイが日本へ紹介されるのは、いつころですか。

吉川 わりあい早いのです。彼の名著である *Democracy and Education* (一九一六年—大正五年) など、出版された年にもう翻

訳されておりますから。

ただ、日本人の理解の仕方というのは、デューイが「社会」といつているのを「国」と解釈した。国があつて個人が育つ、こう解釈した。国家はあるが社会という概念がなかったのです。今日でも日本では、国と社会ははっきり区別されていませんね。

社会というのは人間がつくっているものでしよう、だから、あるときは「社会」といい、あるときは「個人」と呼んでいるので、これは一体なんですか。この関係がどうなるかということが教育の基礎なんで、消極的にいえば、社会から離れて教育はありえず、個人から離れて教育はありえない、というふうに言えるでしょう。

——紹介は早かったけれども、正確には理解していなかったというのは考えさせられます。

吉川 私が同志社に学んでいましたころは大正デモクラシーの時代で、いろんな学説が唱えられていました。

同志社へも吉野作造といった方がよく来られて、講演をしましたが、この方もデューイの影響を受けていないとはいえない。しかし

「民主主義」とは言わないで「民本主義」というのです。天皇制がありましたから、民心ではないのです。「民本政治」を唱えたいわけです。

それから同志社に中島重先生がおられました。家が近くなのでよくお話をする機会がありました。デューイはよくわからないと申しておられました。私はそのころデューイについては知らなかったので聞き流しておりましたが……。

——先生はアメリカ留学中からデューイを研究しておられるのですから、日本では早いですね。

吉川 戦前（昭和六年三月）に帰国しました。『デューイによる教育学』を出版したのも戦前だし、その関係の論文も書きましたから。

——デューイがブームのようになるのは戦後でしょう。私なども大学で教えられました。

吉川 戦後、デモクラシーということが盛んにいわれるようになりまして、それとの関連ですね。私はそれ以前からずっとやっていますから、あちこちに招かれて話などさせら

れました。上野（直感）先生にいわれて、今井仙一先生などと一緒に大阪で講演会をやったこともありまして、そのとき聴きに來ていたのが、いま同志社の教授になっている森草博君ですよ。彼は私のデューイの講演を聞いたのがきっかけで同志社へ入学したのです。

デューイがあまり好きでない志賀（英雄）先生などもいましたが、「吉川さんは別や、あなたは戦前からやっているんやから」（笑）と言われたことがあります。戦後に変節したのではないというわけです。

#### 同志社での教員生活

——帰国なさってすぐ同志社の先生になられたんですか。

吉川 そうです、専門学校で教えるようになります。アメリカにいましたとき、オベリンで友達になった二宮（源兵）という方が同志社大学の予科で教えていたんですが、二宮さんが本宮（弥兵衛）先生に私のことを話されたものですから、同志社へ帰って教育史をやってくれと招いて下さったのです。アメリカの下町でごろごろしていましたので、同志社の教授になるというので新聞に書きたて

られるやら、ご馳走してくれるやら、向うで大騒ぎでした。

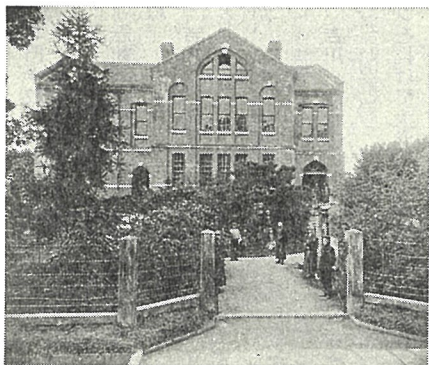
——先ほど戦後に変節したのではないというお話がありました。戦時中は大変だったんでしょう。

吉川 記録などには、学校や思想や行動が弾圧されたと出てきますが、私にはそれがむしろ不思議なんです。私はそのころやっていた講義と、戦後の講義とちっとも変らないんです。圧迫を感じたことはなかった。

さっき言いましたように、戦前すでにデューイの著書を翻訳してもいましたが、社会と国家をとりちがえるという問題はありません。けれども、日本人にはすつと理解してもらえない理論だった。いわゆる軍国主義の時代だったので、連中が「国家」といっているのを、こちらは「社会」といっているだけで、圧迫する必要がない、何ら問題はないと思われていたのかも知れません。

——先生は同志社専門学校で、ずっと教育学を……。

吉川 教育学が専門なだけけれども、授業時間数の関係もあつたりで、英文科の新聞英語とか英作文、それから英語発音法まで教え



今出川通りから出入りした頃の有終館

ることになって、どちらが専門だかわからないようなことになりました。

私は英語を話す人と結婚しましたので、家では英語を話すことが多かったものだから、「吉川は日本語より英語のほうが楽しい」などという噂がたちまして（笑）、英語が上手だから授業をもたしたらいいということになったのです。しかし、松井七郎先生とか、英語の上手な方は他にたくさんおられるので、私など家の中で話すていどの英語ですら。

### 新島襄について

——それはご謙遜でしようが。ところで、デモクラシーの教育学を研究なさっている先生が見られて、新島襄はどうなんでしょう。新島は当然教育者でもあったわけですが。

吉川 偉い方だとは思いますが。しかし、これまで新島先生について書かれたものうちの私が読んだかぎりでは、先生の人間としての温かみといったものが書かれていないと思うのです。

先生の生い立ちは武士であり、祐筆であった。またニューイングランドではピューリタンの伝統を継いだ厳格なクリスチャン・スクールやクリスチャン・ホームで生活された。そういう生活に少しも違和感を感じられないで、日本へ帰ってキリスト教主義の同志社を創るとか伝道をされる。スキットした感じなんです。

問題は、よくいわれることですが、同志社では新島先生を神格化してはいないか。どんなお話でも、新島先生の言葉が一つ出てこないとおさまらないといった風潮がありますね。そういう風潮は、何か心にそぐわない感

じがあるんです。

——確かにそういう問題はございます。

吉川 もっと人間新島というものが出てきていいんじゃないか。私は先生のような方がお友達の中にいたら実に素晴らしいことだと思っています。しかし、先生を神格化するような風潮に出会うと、反感さえ覚えますし、私を同志社から遠のかせていくような気さえますのです。

私としては、新島先生そして同志社とのかかわりは淡々としている、まあそういう一語に尽きますね。

——新島の全集が完成したら、その全体像がより鮮明になるだろうと思っています。

吉川 そうですね。先生の人間味を表現されているところが、英文の手紙にときどきありますから、ケリーさんが整理されたもの（『新島襄全集 第六巻—英文書簡編』）を読んでみようと思っています。英文の資料が案外、先生の人となりをよく知らせてくれるんじゃないかと、期待しているのです。

## 専門学校の発展的解消

——戦後の学制改革で、同志社専門学校は同志社大学に吸収されたかたちになりますね。

吉川 当時私は専門学校校長でしたから、それについてひとこと申しておきますが、あれは吸収ではないのです。

——と申しますと。

吉川 吸収ではなく、また廃校でもなく、「発展的解消」なのです。そういうスローガンを掲げて大学へ発展的に移行したのです。一度だけですが上野（直蔵）先生が私のところへ来られまして、「あなたは自分とこだけ夜の学校にしてやっていくなんて言っているが、そういう学校にして、他の先生方がついてくると思いますか」と言われた。それは英語の先生方を傘下にもつ上野先生の意思表示だったわけです。そういったことも「発展的解消」というスローガンを生んでゆく要因だったかもしれません。

——専門学校所属の先生や学生がたくさんいたわけですから。

吉川 全国的に、たとえば師範学校が教育

大学になってゆくとかで、たくさん大学ができました。そうした新しく出来ていく大学のように、専門学校が大学に昇格していく、それが専門学校先生の率直な願いであり希望でした。

——わかります。

吉川 だから、専門学校は廃校にはしない、専門学校を捨ててしまおうのではない、新制同志社大学を立派なものにするために専門学校の教師たちも協力する。生徒たちはあと何年か責任をもって教育するが、新しく募集はしない。そして発展的に解消していった、専門学校という形を消してゆく、そういうことであつたので、大学に吸収されてしまった廃校になったというのではなかつたのです。いつの間にか発展的に大学になっていった、そして旧来の専門学校はいつの間にか消えていた、というわけです。

——教員の資格審査はあつたわけでしょう、文部省の。

吉川 それはありました。そのために、二、三の専門学校の教授が助教授になつたとか、不満も全くないことはなかつたのですが、全体的には皆いちおう納得してくれまし

て、発展的に大学へ移行していったのです。今にして思えば、「発展的解消」というスローガンは、大学教員になつて同志社に残りたという教員の個人的な欲求と無関係だつたかどうかなど、多少疑問もなくはありませんが。

## 教育部長として

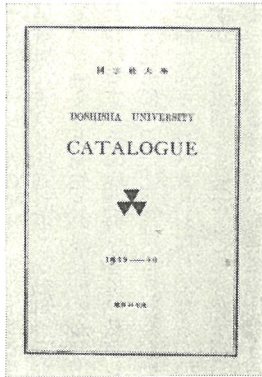
——先生は、新制大学が発足して間もない一九五〇（昭和二十五）年から四年間、大学の教育部長をなさいますね。

吉川 当時はレジストラと申しました。レジストラというのは学長の教学事務の実行機関なので、学長の次の位置ですからいろんな権限が与えられましたし、仕事もできたのです。たとえば入学試験の最高責任者は私でしたから。

その後、学部の意見などがいろいろ出てまいりまして、レジストラは教務じゃないか、各学部長と対等でなくてはいけないじゃないかというようなことで、まア凋落はありました。最初は今いったようなことでした。

——入試をどうやるか、これは大問題です





同志社大学最初のカタログ

が、先生が責任者であられたころ、同志社大学は膨張しますね。

吉川 統計的にどうなるか把握しておりませんが、デモクラシーの波が全国的に押し寄せてくる、それに応えるかたちで、あるいはそれに力を得たようなかたちで、学生をたくさん受け入れていったわけです。

——旧制時代とは、大学の性格そのものがちがってまいりましたから。

吉川 なんとといってもアメリカの大学がモデルになりますから、私は大学の組織などを研究するために、アメリカをはじめ海外の大学のカタログを全部集めました。これもひと仕事でした。そのとき私が集めた資料の量

は、関西では第一だったと思います。それらをもとにして、今日いうカタログを作りましょう。

——“DOSHISHA UNIVERSITY CATALOGUE”ですね。

吉川 そうです。公立大学からももらいにきまして、大学カタログのモデルになりました。その中に、同志社内内の学部組織を一表におさめたのがありますが、大塚(節治)先生なども「こんなにまでしなくてもよかったですね。やないか」といわれましたし、学校を機械的に区分しているといった批判がありました。

——今日では考えられませんか。

吉川 他大学からも非常に関心をもたれまして、海外の資料を豊富に使っていただけ、同志社は一歩前へ出ていたわけです。

それから、私が部長時代に熱心にやりましたことの一つは、校庭の道をベープすることと、電線を見えなくすることでした。

——と申しますと。

吉川 そのころの同志社の道は、雨でも降りますと泥道になって、休憩時間の十分間には教室から教室へ移動できない状態だったの

です。だから、道をベープにしろとやかましく申しましてね。

それから電線ですが、これを全部地下へ埋めるように言いまして、当時はみずばらしい電柱が立っていたものですが、それをなくしてしまったのです。

そのころのことですから、そんなことに金を使うのはけしからんと、随分反対もありましたけれども、私としては今日の見通しをつけていたつもりで、だからある人は、「吉川シュトラシーシェだ」(笑)。そんなことを言われましてね。しかしまあ、私は私なりに興味をもって部長をやらせてもらいました。

#### 社会への大学の奉仕

吉川 お話したいことはいろいろありますが、最後にもう一つだけ申し上げたいことは、大学が社会に奉仕するということです。私が南加大学で教育学を学んだことは先ほど申しました。

——はい。

吉川 戦前のことですが、その大学の総長であるボン・クライン・シュミットという先生が日本へこられたとき、デントン先生の家

へ遊びに寄られたのです。デントン先生は私が南加大学の出身であることを知っておられて、シュミット先生との昼食に呼んで下さったわけです。その昼食のときに、私がシュミット先生に、「南加大学はどうしてもっと広い静かなキャンパスへお移りにならないんですか」と質問したところ、先生は、「いまの所にいるほうが、社会に奉仕できると思いますが、だからあそこにいるのです」とこたえられまして、私はドキッとすることがあります。

——地域社会に対してという意味ですか。

吉川 それもあります。私はときどきシュミット先生のとときの言葉を思い出すのですが、同志社はそういう考え方がばやけてきてはいないか。同志社をよい学校にする、それは誰しも考えていることです。しかし、よい学校にするというとき、まずキャンパスを広げるとか、建物を立派にするとか、そういうことが表面に出まして、社会に、ひいては学生に奉仕するという考え方が背後にかくれているわけです。皆さんがそのことを忘れているとは思いませんが、表に出てこないでしよう。

——あまり耳にしません。

吉川 同志社は社会に対してどういう役割を負っているのか、社会に対してどういう奉仕ができるのか。田辺へ移ることによって、社会に対して何をしようとするのか、また何ができるのか、大切なはそのことなんで、それが学校の在り方を考えるうえで、重要な一つのポイントでなくてはいけないはずなのに、それが薄らいでいるのです。

——薄らいでいるというか、議論が後まわしになっているという印象はございます。

吉川 私はいま同志社の方たちが、新島先生の遺志を継いで、同志社を立派な大学にしたいかんといいことで、一生懸命にやりになっていることは十分承知しています。しかし、端的に申しますと、学生をたくさん集めるためにどうするかということ、学生にもっと恵まれた形での教育を施すにはどうあるべきかということでは、考え方がちがうのです。

いま、たとえば北海道で出張試験をするといったことが問題になっているようにうかがっています、それはいつも問題になることです。しかしそれは、同志社が社会に奉仕す

るといふ観点に立って考えれば、その是非はすぐわかることで、問題を見る角度がちがっているわけですね。

私は同志社が田辺に移ることをいまとやかく申し上げるつもりはありません。しかし、移ってすぐに動きだしているわけですから、その上になつて、同志社は社会にどういう貢献をしようとしているのか、どういう役割をはたすべきなのか、そして何が貢献できるのか、そういう点に大学を考える急所のようなものがあることをどうか忘れないでいただきたい、その問題を一つ一つ押えていただきたいと、これだけはぜひお願いしておきたかったです。

——よくわかりました。どうも長時間たいへん有意義なお話をありがとうございました。

最後になりましたが、先生はジョン・デューイ研究のために、同志社大学に多額のご寄付を最近いただいたと承りました。同志社の一員として心からお礼申し上げます。

(一九八六年十二月十八日、吉川名誉教授宅で収録)